

終章 論文の概要と今後の課題

本論文の主要な目的は、宗教的人格をめぐって創造されてきた伝記を、その人物を中心として展開する宗教的意味世界を明らかにする独特な宗教的表現様式の一つとして捉え、その宗教的構造を明らかにすることにあつた。そのことは同時に、「聖なる伝記」(聖伝)が宗教学のカテゴリーとしてどの程度まで普遍性を有しているかを比較宗教学的に検証することを要求する。

伝記一般にいえることであるが、聖伝も、ある特定の「個人」を中心に記述され、またその個人はあくまでも歴史内存在として扱われる。しかし、聖伝は対象となる「個人」について記述するだけでなく、同時に、その「個人」を媒介として現われる、超越的なもの、永遠なるものの表現・解釈を志向する点で他の俗なる伝記と異なる。すべての聖伝において、ミソ＝ヒストリカルな叙述のスタイルの要請される理由が、そこにある。聖伝に登場する人物には、さまざまな象徴的エピソードが付随しているが、神秘と謎に満ちたそれらの出来事のシンボリックな意味の解釈は、それら全体を整合的かつ統合的に理解させる聖伝の構想力にかかっている。その全体的理解の解釈の枠組を提供するのが聖なる人物の「人生」であり、それゆえにイエスやブツダや聖徳太子は、「個人」でありながら、同時に「パラダイム」として、また「ヒストリカル・プロトタイプ」として、それぞれの聖伝の宗教的中心において、固有の意味世界を開示する。

聖なる「個人」についての叙述は、歴史に規定されつつも、その歴史を超越し、逆に歴史を意味付ける。本論文が聖徳太子伝を考察の対象に選んだのも、聖伝の構造に特徴的なこのダイナミックな展開を明らかに示しているからであった。聖徳太子に関する伝記は、日本の宗教史のみならず、おそらく日本の歴史全体を通じて、もっとも豊富なヴァリエーションをもつものの一つであることは疑いえない。特に、古代から中世初期にかけて編まれた太子伝群において展開し『聖徳太子伝暦』において結晶化された「聖徳太子」のイメージが、その後の聖伝叙述にとって一つの「ヒストリカル・プロトタイプ」と見なされており、さらにそこに描写される「聖者」像は、日本宗教における聖なる人間の「パラダイム」として、現在にまで受容され続けている。したがって、『伝暦』を中心とする太子伝を、その歴史性を考慮に入れながら比較考察することは、

日本における聖伝の展開を歴史的に跡付けることになると同時に、聖伝の普遍的な構造について考察する上で重要な手がかりを提供する。

かかる問題意識に則って、本論文は、聖徳太子について書かれたいくつもの伝記を比較検討し、それらを生み出し語り伝えていった人々の救済論的願望を中心軸に、「聖なる伝記」ないし「聖伝」の生成に見られる歴史的・宗教的なダイナミズムを構造的に明らかにしようとした。

そのための予備的考察として序論では、まず第一章において本論文の方法論的視座を提示した。すなわち、本論文は、宗教現象の文化的・歴史的特殊性を問う宗教史的アプローチと、体系的・構造的普遍性を問題にする宗教現象学的アプローチとを総合することによって、宗教現象の統合的理解に達しようとする解釈学的方法論に基づき、人類の宗教体験および歴史におけるその多様なあらわれの本質と構造の解明を志向する宗教学に寄与することを企図している。同時に、近代的な「歴史」観にとらわれず、「歴史」の重層的な意味を問い直すことも本論文の主題の一つである。

第二章では、はじめに宗教学のカテゴリーとしての「聖伝」の概念的枠組を確定することを試みた後で、聖伝に関する先行研究の批判的検討を行い、さらに「神話」と「歴史」に共通する物語的構造が聖伝の理解にとっても有効であること、その構造がまた、人間存在の歴史性の根底に、あるいはさまざまな歴史的出来事の背後にコスモロジカルな意味を付与し、そのことで「恐怖」としての歴史を解体し、「救済」としての歴史を構築するという、聖伝のダイナミックな宗教的構造を支えていることを示唆した。

本論では、まず第三章において、そもそも聖徳太子とはいかなる人物であったのか、いかにして聖伝が書かれるに至ったのかを考察した。

まず第一節において『日本書紀』記載の厩戸王＝皇太子関連記事をもとにしつつその「原像」を描き出した。そこでは古代日本国家における政治的・宗教的偉人としての太子像が導かれた。第二節では、太子薨去後ただちに、太子に対する崇敬の念がその遺族を中心に生じていたことを、「天寿国継帳銘」を中心に論じた。第三節では、飛鳥・白鳳時代の宗教的・政治的状况を概観し、厩戸

王が生きた時代およびその没後約百年の間に、「氏族仏教」から「国家仏教」への転換が起こり、律令体制が整えられていく過程の中で、「日本の釈尊」としての「聖徳太子」像が形成されていったであろうことを示した。

第四章では、かかる時代背景のもとで国家の「正史」として成立した『日本書紀』の「^{ヒストリオグラフィ}歴史叙述」に、聖者としての聖徳太子が描かれている点に注目し、その宗教的・歴史的意味を考察した。

まず第一節において、『日本書紀』がいかなる「歴史」意識のもとに叙述されたのかを明らかにするために、『古事記』や中国の歴史書と比較検討し、『書紀』の歴史記述がメタヒストリカルなものであることを明らかにした。

第二節では、聖徳太子の誕生にまつわる伝承に見られる、太子の「兼ねて未然を知ろしめす」能力を、倭迹迹日百襲姫の「能く未然を識」る能力と比較し、そこに、天皇のマツリゴトを異性の近親者がシャーマン的予言能力——神託と歴史とを媒介する能力——によって輔弼するという、構造的類似性が見られることを明らかにした。

第三節では、片岡山飢者説話を中心として、そこに尸解仙の宗教現象が見られることから、聖徳太子を「真人」と見なす太子伝に道教の神仙思想が色濃く反映していることを指摘し、日本武尊の白鳥伝説との類似性にも言及した。また、この説話の中心人物が、尸解仙としての飢者ではなく、それを看破した聖徳太子とされていること、その飢者が姓名を問われて答えなかったこと、さらに、聖徳太子がいったん飢者に下賜した衣服を再びみずから着用したことなどの、シンボリックな意味を解釈し、「聖」としての聖徳太子の聖性が、聖伝において象徴的に表現されていることを実証した。

第四節では、聖徳太子自身が歴史を叙述したとされることの歴史的意味を考察することで、『日本書紀』のメタヒストリカルな神話＝歴史記述がいかなる宗教的オリエンタチオに支えられ、方向付けられているかを探究した。そして、推古二十九年（621）に太子が歴史を叙述したとされることと、皇極四年（645）の大化の改新の際にその歴史が大部分焼失してしまったことの二つの歴史的出来事に関する書紀の記事は、有機的に関連しつつ、太子から大化の改新にいたる「歴史の意味」を象徴的に明らかにしていること、さらに後の『聖徳太子伝暦』では、それがコスモロジカルに展開していくこと、そのようにして叙述さ

れた「過去」は、聖徳太子を中心として、「物語的に現在化された過去」として『伝暦』の読者に「現前」することを示唆した。

第五節では、聖徳太子の死去に関する伝承を、日本武尊のそれと比較しながら、後者に見られるミスメリウム・トレメンドウムとしての聖者の在り方と、前者のミスメリウム・ファシナンスとしての聖者の在り方が、著しい好対照を見せながら、両者がその後の日本宗教の展開において、「ミソ＝ヒストリカル」な聖者の「パラダイム」としての地位を獲得することを論じ、さらに聖者の死去は、聖伝においてコスモロジカルかつヒストリカルに表現されていることを指摘した。

第六節では、慧慈悲歎說話を取り上げて、そこに、「歴史記述」によって聖徳太子を聖化しようとする『日本書紀』の宗教的・政治的意図と、逆に「歴史」そのものが「聖徳太子」によって聖化されるという、パラドキシカルな構造を看取り、さらに歴史と神話とが弁証法的に統合される契機を見出した。

最後に第七節では、『日本書紀』の太子記事に看取される、「人間としての太子」と「信仰の対象としての太子」、ないし「歴史的事実としての太子」と「宗教的存在としての太子」の間の構造的緊張関係を、これまでしばしばなされてきたような学問的方法論に内在する史実性と虚構性との間の緊張から説明するのではなく、執政者にして仏法帰依者たる厩戸王と、超人的な神秘性を帯びた「聖」としての聖徳太子との間の緊張、俗なる人間の模範であると同時にその崇拜の対象でもある「聖者」に内在する緊張として論じ、それが、広く聖なる人物に認められるところの、俗なるものを通しての聖なるものの顕現というヒエロファニーの弁証法に普遍的に内在する構造的緊張の歴史的表现の一つであることを、ブッダとの比較を交えて考察した。そして、ヒエロファニーの歴史内顕現に必然的に伴う構造的緊張と、聖伝の「歴史叙述」におけるその表現が、聖なる人間とその事績を中心に歴史を叙述し、その出来事の意味を解釈することで時間の体験の統合的理解を可能たらしめるという、聖伝に普遍的な構造を明らかにしていること、そしてそれは、「歴史を解体しつつ構築する」というヒエロファニーに普遍的に内在する構造的緊張の逆説的表現の力にかかっていること、それゆえに聖伝の「歴史叙述」においては、一方で、歴史的出来事がもたらすカオス的状況としての〈歴史〉を解体しつつ、他方で、過去－現在－未来という時間の流れを意味あるもの＝生きられ得るものとすることを目指した

<歴史>の創造が可能となることを論じた。

第五章では、『日本書紀』以後、『聖徳太子伝暦』にいたるまでの約二百年の間に、さまざまな政治的・宗教的コンテクストにおいて太子のイメージが多様化し、それが太子伝の展開に反映されていることを、いくつかの太子伝を取り上げて比較することで論証した。その結果、聖人伝承を「歴史」の一部として編修する『日本書紀』から太子伝が聖伝として独立して太子の神秘化・聖化が進み、その事績も神話的な装いを帯び始めること、唐から来日した僧思託らの周辺から太子の慧思後身説や法華経将來說話などが生まれ、それらは『七代記』や『上宮皇太子菩薩伝』の中で太子の聖人化・神秘化において重要な役割を果たしたこと、太子を聖人として崇敬する傾向は平安時代にますます顕著になり、その流れの中で、太子を救世観音の化身と見なす信仰が生まれること、平安初期の成立と推測される『上宮聖徳太子伝補闕記』にはまだ救世観音は登場しないが、「金色僧」にその萌芽が感じられること、『補闕記』はとりわけ太子に関する奇異の伝承を集めることに主眼がおかれている点でそれまでの太子伝と大きく異なり、その点で『補闕記』は『聖徳太子伝暦』の先駆けでもあったこと、など、聖伝のダイナミックな歴史的展開が跡付けられた。

第六章では、聖徳太子伝の中でも、もっとも重要なものの一つである『聖徳太子伝暦』を中心に、その象徴的意味を比較宗教学的に考察した。

第一節は、夢による受胎告知を日光懐胎説話との関連で論じ、また、イエスの誕生譚と比較して、聖徳太子とイエスのいずれの懐胎・誕生も、コスモロジカルでシンボリックな表現によって新しい世界の始まりを告げるものとして意味付けられていること、それぞれの聖伝の共同体にとっては、太子の生誕、イエスの生誕という、一回限りの歴史的出来事が、永遠に繰り返される宇宙の更新を新たに意味付けること、そこにおいて、円環的・神話的な時間が直線的・歴史的な時間に接ぎ木され、聖なる神話＝歴史がコスモゴニックな（宇宙創造神話的）地平において展開すること、などを明らかにした。

第二節では、二歳の太子が東に向かって合掌し、「南無仏」と唱えたという伝

509 野家啓一「はしがき」同責任編集『岩波新・哲学講義 8 歴史と終末論』、v頁。

510 同上『物語の哲学』、19頁。

承を、いわゆる「ブツダの七歩」の伝承と対比させ、北へ歩むブツダが、七つの天界を通過して宇宙の頂点である北極星に到達することによってこの世界を超越し、その行為は同時にコスモゴニックな意味を表わしているのに対し、東面する聖徳太子は、一方で太陽神＝天照大神のイメージと、他方で円環的時間意識と結びついて、永遠に繰り返される世界創造と照応することを指摘した。また、西方から去来した菩薩＝聖徳太子が東面する行為は、過去から未来へという時間の流れを日拝によって更新＝聖化するコスモロジカルな儀礼として解釈されうること、一方で、浄土はまた、死後おもむくであろう来世であり、その意味で未来でもあって、このように浄土が過去とも未来とも結びつくのは、それが現世的な時間・空間を超越しているからであり、そのシンボリズムは、過去が未来に、未来が過去に転換する時間意識を喚起すること、その意味で浄土は、永遠に循環する時間という意識の空間的表象であることなどを論じた。

また、太子が百済の賢者日羅を謁見したとする記事に、片岡山飢者説話と共通の構造が見られること、その記事には、百済王寺阿佐が太子を拝したことを伝える記事とともに、百済の聖明王による日本への仏教公伝という歴史的出来事との関連性がうかがえることを指摘するとともに、それらの背後に、亡国という過酷な歴史的出来事を体験し、その記憶が払拭できない帰化人たちにとっても、『伝暦』の描く「聖徳太子」が、「歴史」を浄化・再生するコスモゴニックで神話＝歴史的な中心的シンボルとして受容された可能性があることを示唆した。

第三節は、聖徳太子の「神通力」を表現する記事のいくつかを取り上げ、道教の神仙がもつ超能力や仏・菩薩がもつ無碍自在の神秘的な能力と、構造的共通性を有していることを明らかにするとともに、これらの超人的・神秘的な能力が、世界中の聖者に伴う宗教現象であり、宗教学的には、とくにその社会学的な側面が重要であること、すなわち、ある特殊な能力や「奇跡」を、不思議な、異常な、奇妙な、そして何よりも称賛に値するものであるとみなす、傍観者 (spectator) の存在が不可欠であることを論じた。また、聖伝においては、その作者と読者の双方がこの「傍観者の共同体」(「共観」の共同体)を形成する。換言すれば、聖伝作者と読者との間に、何を奇跡と見なすかの共通理解があって初めて、ある行為が奇跡という宗教現象として解釈され、理解されうることを指摘した。

第四節は、聖徳太子と黒駒の関係を、ブツダとその愛馬カンタカとの関係と平行に論じ、それらに内在するシンボリックな意味について解釈を試みた。

第五節では、太子の仏教的「真人」性は、仏教經典、とりわけ『法華經』とのかかわりにおいて際立つことを指摘した上で、「皇太子」が天皇に講經したことの、歴史的・政治的意味、さらにそこに付け加えられた蓮華にまつわるエピソードのコスモロジカルで宗教的な意味とを解釈した。

最後に第七章では、『伝暦』において太子自身が過去と未来を語るその「語り」を通して、歴史を統合的に理解するための枠組を提供するメタヒストリーとしての聖伝の宗教的構造を論じた。

第一節では、『伝暦』において太子の前生が繰り返し語られていることを取り上げ、それらに共通する構造として、第一に、聖徳太子の前身のみならず、来朝する僧の多くが衡山で修行したとされている点、第二に、外国から来朝した僧たちが、聖徳太子の前生において自分たちが教えを受けたことを表明している点、そして第三、前生において繰り返し僧として修行を重ねてきた聖徳太子が日本においては為政者として生を送っている点を指摘し、それぞれの歴史的・宗教的意味を考察した。とりわけ最後の点に関して、真理を追究するために生れたばかりの息子を残してあえて出家したゴータマに対比して、衆生を救うために太子はあえて出家をあきらめたとする『伝暦』の歴史解釈が読み取れることを示唆した。また、死して後、再び出家入道して衆生を救済し、五百身を経て彼岸に至るという太子の言明に、永遠の真理としての法（法華經）と、有限で歴史的な存在としての人（聖徳太子）とが相互に働き合うことによって、過去から現在を経て未来へ到る時間の流れが「聖なる歴史」へと昇華されることの宗教的表現を見出し、そこに聖徳太子に投影ないしシンボライズされた救済の「歴史」を指摘した。

第二節では、太子が慧思の後身であるという慧思後身説が太子七生説話と融合して展開する「伝記的過程」を跡付けた上で、太子を慧思の後身＝完成と見なすことによって、慧思の宗教的人格のみならず慧思の存在すべてが、聖徳太子という宗教的人格に限りなく収斂していくことを論じ、また、『伝暦』に、先行する仏・菩薩・聖者の「完成」としての聖徳太子を中心とする同心円的構造が看取されることを明らかにした。

第三節では、太子自身の後身とされる事例を、『伝暦』のみならず、『日本靈異記』や『東大寺要録』、『太子伝古今目録抄』、『荒陵寺御手印縁起』などに求め、聖武天皇、行基、弘法大師、伝教大師、聖宝、藤原道長など、多くの人物が太子の後身と見なされていたこと、その背景として太子自身の転生五百身の誓願が重要な役割を果たしたであろうこと、さらに『荒陵寺御手印縁起』に到っては、出家・在家、貴賤・貧富を問わず、教法を弘め、衆生を救済するものはみな太子の後身であるというところまで展開しており、ここに太子後身説が一つの頂点に到達することを論じた。すなわち、そこには、太子のいのちが永遠であることに対する宗教的理解とその伝記的表現が窺える。太子の後身と見なされた人々は皆、太子を尊崇していたが、さらにそれらの人物を太子の後身と見なした人々もまた、それらの人物を通して太子を崇拝したのであって、このようにして聖徳太子の聖伝は、厩戸王という歴史的存在を超越して、同時代性を獲得していくと同時に、それはまた、太子の衆生済度の誓願が久遠であることへの救済論的願望を反映した「聖なる歴史」にもなっていくことを指摘した。

第四節は、とくに太子による予言に焦点を置き、それらのエピソードの象徴的意味を解釈した。そして、それらのエピソードに、宇宙論的・神話的な側面と救済論的・歴史的側面との融合が看取されること、またそのことによって聖伝は、通時的だけでなく共時的にも読まれうることを論じた。さらに、日本仏教を含めた国家全体の「歴史」的展開において決定的に重要な出来事を、聖徳太子が前もって見通していた、換言すれば、日本の「歴史」が聖徳太子の語ったとおりに「実現」されているという、『伝暦』の「歴史」理解があり、その観点からすれば、太子の予言（予め言うこと）は、「語り」において「現在化された未来」であるとも言えることを示唆した。

さらに『靈異記』と『伝暦』を比較して、説話集としての『靈異記』が、因果の観念を通じて、過去を現在化しつつ説明するのに対し、聖伝としての『伝暦』では、後身の論理によって、絶えず未来が現在化されるという構造的な相違点を指摘した。また、両者とも因果応報的な時間・空間を舞台とした多くの物語が語られる点では共通しているが、前者の目的が、あくまでもそれらの物語を通して民衆を教化しようとする「説話」的なものであるのに対し、後者の場合は、むしろ聖徳太子が偉大な聖者であり、また「菩薩」であったことを示

すために、因果応報的挿話が用いられている点で大きく異なること、すなわち、前者の中心は仏教の教え（法）であるが、後者の中心はあくまでも聖徳太子個人であることを論じた。

最後に第五節において、円環的時間と直線的時間の観念を用いて、『伝暦』の「歴史叙述」における「過去」が絶えず「現前する過去」であることを論じつつ、聖徳太子がその前生において繰り返し出家修行したことや、現身の太子が先行する聖者の「完成」であること、また衆生済度の誓願ゆえにその後生に繰り返し「現在」し続けていることなどの出来事が、直線的時間観念に基づいた「歴史」としてではなく、円環的時間観念に基づく「神話＝歴史」として、聖伝の救済論的構造を支えていることを論じた。

以上が本論文の要旨であるが、最後に、本論文において十分展開できなかった問題、また、新たに見えてきた課題についてまとめておきたい。

まず、聖徳太子伝の個々のエピソードに則した解釈にやや拘泥しすぎた嫌いがあり、その分、太子伝全体の意味解釈や、聖伝そのものの構造の比較宗教学的考察へと、十分に展開できなかった。その結果、「聖伝」が宗教学のカテゴリーとしてどこまで普遍性を有しているか、また、本論文で論じたような聖伝の宗教的構造が、他の宗教伝統における聖伝理解に対してどの程度有効でありうるか、といった問題については、当初目論んだほど論じられていない。

また、そのこととも関連するが、とくに、聖伝の構造に関する第七章の考究が不徹底で、「神話」、「歴史」、「物語」などと「聖伝」との関連も含めて、解明が不十分と感じられる点が多い。具体的な聖伝の比較に基づいた、より緻密でかつ包括的な理論的考察が必要である。

太子伝にかかわって言えば、本論文では、主に『聖徳太子伝暦』までを考察の対象としたが、救済論的な歴史叙述としての聖伝の特殊性を論じるために、また中世の歴史叙述一般の宗教的意味を考察する上でも、鎌倉から室町にかけて流行した、いわゆる「聖徳太子未来記」の解釈の重要性が痛感される。

比較の観点からは、ブッダ伝や中国の高僧伝、あるいは日本における空海伝や行基伝、役行者伝などを、さらにイエスやムハンマド、その他の聖伝を広く視野に入れながら、聖伝の構造についてさらに包括的な研究を行なう必要があり、また、聖者本人による自伝 (autobiography) とそれ以外の聖伝との構造的比

較も、今後の重要な課題である。

さらに、一方で、A.コジエーヴの〈ポスト歴史〉論や、それを展開した F.フクヤマの『歴史の終わり』(1992年)が提起した問題を、他方で、アナル派の歴史学が提示している「ロング・デュレー」の問題も視野に収めつつ、現代社会における「歴史」の理解とかがわって、聖伝の今日的意義が問題とされるべきであろう。